

---

# **機動戦士ガンダム0083 もう一つの星の屑**

大根

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダム0083 もう一つの星の屑

### 【Zコード】

N4459Y

### 【作者名】

大根

### 【あらすじ】

連邦軍の落ちこぼれ兵士ランドは、ガンダム試作二号機の奪取に、偶然にも居合わせてしまったことで、宇宙世紀の闇に消された。

『デラーズフリート』

の反乱に、巻き込まれていくことになる。

## トロンティン基地強襲直前（前書き）

エーツと、新作で、偉そうなタイトルを着けていますが、内容は肩です。

風邪を引きながら書いたのでかなり間違いが有ると思いますので、良ければ、ご指摘、アドバイスをして頂ければありがたいです m(\_)

## トリントン基地強襲直前

### （第一部）

雄大に広がるオーストラリア大陸  
しかし、その雄大さには、会わない物がその大地のあちらこちらに  
突き刺さっている。

モビルスーシは愚か、戦艦よりも巨大な破片。

一年戦争において、ジオン公国が行った、コロニー落とし。

『ブリティッシュ作戦』の傷痕である。

かつてコロニーが落ち、オーストラリアの首都、シドニーが丸々消え去った場所。

直径100kmにも及ぶ、最大の人口のクレーター

かつての面影を全く残していないそこで、幾つかの影が破片の周り  
を飛び交っている。

? ? ? 1 「あ、当たつてくれ！」

氣弱な声と共に、ザクからマシンガンが発射される。  
目的は、前方のジムタイプだ。

しかし、ジムタイプは、空に飛び上がり、降下しながらマシンガン  
を撃つてくる。

? ? ? 1 「う、上から！！」

立体的なその動きについていけず、マシンガンがザクに当たる。  
しかし、ザクは被弾もせず、ピンク色のペイントが着くだけだ。

実戦なら、確実に撃破されているであろう。

? ? ? ? ? 「おいおい。新兵さんは士官学校でお勉強をしなかつたのか??？」

ふざけたように低い声が響き、ジムタイプは攻撃をやめる。

? ? ? ? ? 「クッソー！まだ勝負は着いてませんよ！」

ザクは、マシンガンを構え、ジムタイプに突っ込んで行く。

? ? ? ? ? 1 「48・・・49・・・50・・・終わつたあああ～！」

！」

そう言いながら、腕立てを終えた若い男は、地面に突っ伏す。

? ? ? ? ? 2 「ランド。もうくばつてんのか？」

そこに、低い親父声が響く。

ランド「カレント隊長…だ、大丈夫ですよ」

カレントと呼ばれた中年の男性は、やれやれと言いながら、去つていった。

ランド「クッソー！後少しだったのに…」

模擬戦でカレントに負けたランドは、罰として、腕立てをさせられ

たのだ。

?・?・?・?「ランド。お前また隊長に負けたんだろ！…やまあねえな。

」

男は笑いながら、未だ地面に突つ伏しているランドを嘲笑う。

ランド「アストンーう、うるさい！お前だつて隊長に勝つたことな・  
・あるか・・・」

ランドは、強くいいかけたが、直ぐに言葉を濁してしまう。

アストン「俺様はエリートだからな！落ちこぼれランドよお

徹底的に罵倒していくアストン

ランド「ぐぬぬぬ・・・何も・・・言えない・・・」

事実を言われランドはさらに塞ぎ込んでしまう。

アストン「じゃあなあーー落ちこぼれ醜男ランド。俺はこれから  
これなんだよ？」

アストンは、小指を立てながらゆっくりと去っていった。

ランド「へへへ・・・好き勝手言いやがつてーー！」

2人の因縁は、士官学校時代まで遡る。

アストンは、代々軍人の家系に生まれた。。

さらさらの金髪に甘いマスク、モビルスーツの操縦も一級品で、性格意外はパーフェクトといつてもよい男だった。

士官学校を首席で卒業。

将来を約束されたエリートだった。

それに引き替えランドは、普通の家に生まれた次男坊。

黒い髪も適当に耳の辺りまで、切つただけ。

元気があり、モビルスーツの操縦もそれなりに出来るのだが、いざと言つ時何も出来ない。

要するにヘタレだ。

顔はそれなりにイケメンで優しい性格をしているが、お洒落等には興味が無く。女性に全くモテない灰色の人生を送っていた。

士官学校を落第すれすれで卒業した、『落ちこぼれ』である。

この2人は、オーストラリア、トリンントン基地でテストパイロットとなる。

エリートと落ちこぼれ。両極端な2人が会うはずが無く、アストンは、何かとランドを見下しては鬱憤をはらしていた。

以上が、ランドとアストンの因縁の経緯である。

ランド「・・・帰るか・・・」

ランドは落ち込みながら、宿舎へと向かうのだった。

? ? ? 3 「見るよキース。ペガサス級だぜ！」

キース「コウ。言わなくてもわかってるよ。」

すると、途端に辺りが騒がしくなり、光が遮られる。

ランド「な、なんだ！」

ランドはあわてて振り向き、言葉を失った。

空には、巨大な戦艦が浮かび、いままさに降りて来るところであった。

ランド「嘘だろ・・・ペ、ペガサス級！」

かつて、連邦の白い悪魔を載せていた艦と、同じ系列の艦が、ランドの前に降り立つたのだ。

「ウ「おい、キース！見に行つてみよ!」

キース「マジかよ！？・・・わかったよ！」

「ウと呼ばれている黒髪の青年と、キースと呼ばれているメガネの青年が、降り立つて来た戦艦に行つとして、ジープに乗る。

ランド「あ、待ってくれ。おれも載せてつてもらえないか？」

ランドも居ても立つてもいられず、2人に話しかける。

「ウ「別にいいぜ」

キース「お前も物好きだなあ」

ランド「サンキュー・・・よし、いいぞ。」

ランドはジープに乗り込む。

「ウ「よし、じゃあ行くぞ」

コウは、3人を載せた。ジープを戦艦に向かつて走らせた。

## コーンタン基地強襲直前（後書き）

相変わらずの駄文ですいません m(—)m  
前作でご指摘を頂きましたが、作者の技量不足により、全く進歩していません。

ランドは、アルビオン隊に入れるつもりなので、強引にコウやキースと絡みを入れていますがそこは許してください m(—)m  
アストンは・・・どうしましょうか？

勢いで書いてしまいましたので(・・・)

何かよいアイディアがあれば、よろしくお願ひします m(—)m

## ガンダム強奪（前書き）

更新遅れてすいませんm(—)m  
達の悪い風邪でして?  
相変わらずの駄文ですが、良ければ、コメントお願いしますm(—)  
— m

## ガンダム強奪

ガタガタと音をたてながらジープがペガサス級に乗り上げる。

「コウ&キース&ランド……」

3人は言葉を失った。

目の前には、伝説とまで言われた、ガンダムタイプのモビルスーツがたつっていたからだ。

コウが一番に口を開いた

「コウ「やつぱりガンダムだ……」

キース「あー……お、おいコウ！見ろよ！」

そう言ってキースが右の方を指差す。

「コウ「ガンダムが2機も！…」

そう言って2人はジープを降りて、ガンダムに近づく。

「コウ「こつちのは「アファイター付きだ。あつちのも凄いな。見ろよあの重装甲」

キース「見れば解るよ」

「ランド「…………」

「ランドは果然としながら、それを見ているしか無かった。

すると、キースがメカニックらしき女性に声を掛け、言い寄つてい  
く。

「コウは相変わらず、ガンダムに」執心だ。

「ランド」「キースって言つたつけ・・・手が速いなあ・・・デカ  
つーなんだあの人! 大の男よりデカイぞ」

キースが大きい女性に絡まれている。キースと並んで、頭一つ文以  
上大きいだろう。

「ランド」「あ、負けた。キースなんか凹んでる」

「どうやらキースは惨敗したようだ。

「ランド」「なんか和むな」

人の不幸は蜜の味、といつやつだ。

「キース」「コウ・・・帰るぞ」

「コウ「待てよ。もうちょっと見てよ」」

「キース」「俺はご傷心なんだよ。」

2人がジープに向かつて来る。

「ランド」「んつ?、ジムタイプか?」

2機のガンダムの向こうに、1機のジムタイプが見える。

「ランド」「(テカイバックパックだな……)」

「一見パワードジムに見えるが、何かが違う。」

「ランド」「(何なんだ、あの機体?どこか……)」

「キース」「コウ~、帰るだ~」

「コウ」「わかったよ……そりゃあ君は……ランド……で、合つてるつけ?」

「コウがランドに向かつて聞いてくる。

「ランド」「ああ、あつてるよ。ランド・シユバイツ。階級は准尉だ。お前らはコウとキースだつけ?」

「一応3人とも、同期なので、名前は知っているようだ。」

「コウ」「ああ、俺はコウ・ウラキ。階級は少尉。呼び方はコウでいいぜ」

「キース」「俺の名前はチャック・キース。同じく少尉だ。キースって呼んでくれ」

「同期だが、あまり面識は無かつたようだ。」

「ランド」「ああ、改めてよろしくな。取り敢えず、夕飯に行くか?親睦を深めるのも大事だしな。」

辺りはそろそろ暗くなつて來た。

「コウ「そうだな。同期同士仲良くなつぜ。」

キース「腹も減つたしなあ。行くか」

そう言つて、3人は夕飯へと向かうのだった。

「コウ「人參要らないよ・・・うえつ」

「コウが食事をとるつとする。人參はたくさん入れられたようだ。

「ランド「子供かよ！」

「ランドは思わず突つ込んでしまつた。

「キース「げつ！」

キースが何か行つたので、そつちを見ると、キースがあしらわれたメカニックの女性と、大きなメカニックがいた。

「ランド「（確か、モーラ・バシット中尉と、二ナさんつて言つたつけ）」

すると、コウがいきなり話しあじめた。

「ウ 「 そ う だ 。 ガ ン ダ ム の 反 応 速 度 は 〇・ 5 、 ぐ ら こ 早 く ・ ・ 」

「 ウ は 何 か ぶ つ ぶ つ と 話 し て い る 。

ランド 「 (ニナさんつて、美人なんだけどなにかな~、コウも、何でそんな話しかしないんだよ。) 」

「 ウ 「 ・ ・ それで、あの重装甲の奴は、対核兵器用で、肩のバズーカは戦術核装備だろ? 」

ニナ 「 え つ ! 」

ニナは相当驚いている。

いきなり、見破られたからだろ? 。

ランド 「 核だつて! ? 」

ランドも驚いている。

核兵器使用は南極条約で禁止されているなのだ。

ランド 「 本 当 の か よ ・ ・ あ 、 そ う 言 え ば 、 あ の ジ ム タ イ プ は 何 な ん だ ? パ ワ ー ド ジ ム と は 何 か 違 う じ ・ ・ 」

モーラ 「 あ れ は 、 パ ワ ー ド ジ ム 改 。 パ ワ ー ド ジ ム の バ ッ ク パ ッ ク を よ り 、 高 性 能 の に 变 え て 、 装 甲 の 一 部 を ル ナ チ タ ニ ウ ム 製 に し た 物 。 ガ ン ダ ム に よ り 近 い デ ー タ を と る た め に 、 改 良 し た の を ジ ャ ブ ロ ー か ら 持 つ て き た の さ 」

そうモーラは説明をしてくれる。

ランド「へえ～、なんか凄いな。」

モーラ「確かにね。手間のかけ方が半端じゃないね。二ナ、いこいつか。」

そう言って、二ナとモーラはどこかへ言ってしまった。

ランド「ジャブローも随分金つかってんだな。」

キース「確かに、あんなに手間かけるなんてな。けど俺たちには関係ないぞ。」

「ウ「まあな。新型は多分、バニング大尉かアレン中尉が乗るんだろう？」

ランド「あの2人が基地の1番と2番だからなあ。まあ良いや。さつさと食おうぜ」

3人は取り敢えず、夕飯を食べる事にしたのだった。

「ウ「なあ。もう一回ガンダムを見に行こうぜ。」

夕飯の後片付けをすませると、「ウがそんな」と言つてきた。

ランド「またかよ。まあいいけど」

キース「俺は勘弁しどきたいんだけどな・・・わかつたよ」

3人は再び、ペガサス級へと向かつた。

その頃、基地に一台の車が入ってきた。  
これが、未曾有の大惨事の始まりになるとは誰も、思いもしないの  
だった。

キース「あれ、なんかやつてるみたいだな？」

重装甲のガンダムに、メカニック達が、何か作業をしているようだ。

二ナ「あなたたち！」こは立ち入り禁止のはずよ！

3人は二ナにばれて案の定怒られてしまつた。

コウ「もしかして今、弾頭装備中なのかい？」

コウが大声で、二ナに訪ねる。

二ナ「ええそりよ。だから邪魔にならないように、出てつて頂戴！  
！」

そういうて、二ナは作業に戻つてしまつ

キース「彼女、あのトゲトゲがなけりや 最高なんだけどな」

「ラング」「激しく同意」

「ウカ」「もつ嫌めうよキース。嫌われてるぜ。ハツキリ言ひて  
キース「わかつてゐよーんなこた。帰ろへ帰つてやけ酒せき合ひへよ  
なー」

「ウカ」「まてよ。もつ少し良いだろ」

キース「だめだ。」

「ラング」「(不味い・・・)じゃあ、また明日。」

何かを感じ取つたラングは早々に逃げようとする。

キース「まて〜にげるな。お前も来るんだよ〜。同期だろ」

「ウカ」「わかつたよ。ラング、お前も道連れだ。行くぞ」

しかし、あっさなく捕まつてしまつ。

「ラング」「うえ〜、わーったよ」

いつも2人は、キースのやけ酒に付き合つ事になつた。

「ウカ」「あーーー」

前方から、上階へじき十両が歩いてくる。

ザツ

と3人とも敬礼をする。  
すると、向こうも敬礼で返してくれる。

ランド「（見たことない人だな？ペガサス級の人か？）」

「？？？「素晴らしい。見事なモビルスーツだ」

コウ「自分もそう思います」

「ウは生真面目に、そう答える。

「？？？「君？バズーカに弾頭の装備はすんでいるのかね？」

コウ「は、はい？」

「？？？「では、試してみるか・・・」

そう答えると、士官は、ガンダムタイプのコックピットへと登つて  
言った。

ランド「？？？」

しかし、もう遅かった。

二ナ「まったくあの3人今度はまた何かやり始めたわ・・・あなつ  
！はあつ！」

振り向いた二ナは、驚愕した。

ガンダムタイプのハッチが開き、士官が中に入り込もうとしたのだ。

二ナ「何してんの…！ハッチを開めて降りなさい…！」

すると、士官は振り向いて

？？？「フッ！」

と慌って、ガンダムタイプに乗り込んだ。

二ナ「誰よあれ…！」

二ナは、いつもたつてもいられず、ガンダムタイプのところへと向かつた。

「ウ「なんだ？」

キース「どうした？」

ランド「うつやばじつで…」

すると、2号機は、ケーブルを千切り、動き出した。

二ナ「誰かっ！誰か2号機を止めて…！」キース「なんだ？なんだ？」

ランド「嘘だろー。」んなの

「ウ「くつー。」

キース「お、おこウつー。」

すると、「ウウはもう一機のガンダムに向けて走り出した。  
そして、ガンダム1号機のハッチを開ける。

モーラ「ウラキ少尉！他の人を呼ぶわ。あなたじゃーー。」

「ウウ「僕だつてパイロットだ！」

モーラ「今救弾中よ。すぐには出せないわ。」

「ウウ「急いでください」

二ナ「2号機のパイロット。聞こえてるでしょ？今すぐに降りれば、  
罪は軽いわ！今すぐに降りなさい！」

？？？「この機体と核弾頭は頂いていく。ジオン再興のためにーー。」

このモビルスーツテックにいた全員が驚愕した。

二ナ「つーー？」

「ウウ「ジオンだとーー？」

2号機は、ゲーム・サーベルを使い、ペガサス級のハッチを切り裂  
き、飛び出した。

キース「嘘だろー！俺は大尉のところに行つてくれる。ランドー行くぞ  
！」

ランド「キース・・・先にいっててくれ・・・俺はここにつで出る

「ランドはやつ」って、パワード・ジム改を見上げた。

キース「えっ！わかったよ。わかりましたよ。俺一人で行くよ」

そういうて、キースはジープで飛び出した。

すると、1号機も歩き、ハッチを飛び出す。

ランド「ここには動きますか！？」

モーラ「貴方まで！？・・・救弾はすぐ済むわ！」

ランド「わかりました」

ヒュルルルルルルル・・・  
・・・  
チコドビドビドビドビドビ  
チコドビドビドビドビドビ  
チコドビドビドビドビドビ

キース「今さらジオンが何しようつてんだよお～！」

基地一面に、ミサイルが降り注ぐ。当たり一面は、とても、終戦しているとは思えない惨状だ。

連邦兵士「カーカス、キース急げ！」

バーニング「模擬戦じゃないぞ！みんな気を引き締めて行け！」

キース「大尉」ジオンが核弾頭装備の2号機を奪つて行きました！」

カーカス「ジオンだと！あいつらまた戦争をやる気なのか！何人殺せば気が済むんだよ！」

バーニング「いそくぞ！」

そういうてパイロット達はモビルスーツに乗り込む。

ガシヨン

パワード・ジムが格納庫から飛び出す。

すると、そこへ、バズーカが飛んでくる

アレン「！？」

パワード・ジムは、間一髪で避ける！

後続のカーカスのザクがマシンガンを構える。

カーカス「うわああああああー」

「マシンガンをめちゃくちゃにひひ始める。

ドムが迫つて来ていたからだ。

しかし、手練れのパイロットにそんなものが通じるわけもなく、胴体を一閃され、地面に倒れる。

キース「あ、あ、あ」

キースは実際の戦場を田の当たりに、震えていた。

？？？「ゲイリーか！作戦成功だ脱出する」

「ウ「ここから出すわけにはいかない！」

すると1号機は、ビーム・サーベルを構え、2号機の前に立ちふさがつた。

連邦管制官「基地北東より、別部隊確認、残った部隊は至急、指令部の防衛に当たられたし」

モーラ「増援！そんな馬鹿な！」

基地の北東にみすみす侵入を許してしまったのだ。

「…ランド、1号機…2号機を頼む…俺は、指令部の防衛に出ます。」

そして、パワード・ジム改は、トロントンの激戦の中へと飛び出した。

## ガンダム強奪（後書き）

えーっと・・・原作のままです？

このあとはランドの戦闘なので、ちょっと展開を買えます。  
強襲部隊の別動隊を登場させたり、キンバライトには、まだたくさんのモビルスーツがある。などです。

あと、カーサスは生きてるかもしないやられ方にしたつもりなので、何か意見あれば、お願いします m(—)m

今、薬を飲んだので（睡眠導入剤）頭がおかしくなってます。  
批判などはどうぞ「自由にお願いします m(—)m

その文だけ、自分の力になりますので m(—)m

## トロンティン基地攻防戦（前書き）

エーッと・・・更新遅れていますm(――)m  
テストと、たちの悪い風邪にかかりまして？

それと、前回の後書きで暴走してしまいますいませんでしたm(――)

m  
カーブスは、本来死んでますが、出そと・・・思つてます。  
長かったのに、内容スカスカの駄文ですが、良ければお願ひします  
m(――) m

## トリンタン基地攻防戦

2体のガンダムは、互いに動かず、にらみあつていた。

？？？「ふつ・・・」しゃくな真似を・・・邪魔をするな！」

ガンダム2号機は、先にビーム・サーベルを構え、ガンダム1号機に向かつて、上段切りをする。

ガンダム1号機もなんとかビーム・サーベルを出し、受け止める。

「コウ「えつ？うわあああー」

しかし、ガンダム1号機は受けきれず、弾き飛ばされてしまう。コウが応戦しようとしたモニターを見るが、既にガンダム2号機は視界にはいない。

「コウ「ど、ど二だ？」

すると、後ろから、ガンダム2号機がやつて来て、ガンダム1号機をけりあげる。

戦いは、圧倒的だった。

連邦パイロット「墮ちやがれ！」

ジム改が、前方から迫るドムタイプに向かってマシンガンを発射する。

ドムタイプは、左右によけながら、バズーカを発射してくる。

ジム改も横に避ける。

ドムタイプはジム改のよけた先に、バズーカを撃つ

連邦パイロット「う、うそだああああー！」

ジム改は、反応仕切れず、連邦パイロットの絶叫と共に、バズーカの直撃を受け、爆発する。

ドムタイプはバズーカのリロードをしながら、物陰に隠れ次の敵に備える。

すると、そこに、ランドのパワード・ジム改が降りてくる。

ランド「よし・・・訓練通りやれば」

パワード・ジム改が降りた隙を狙つて、ドムタイプはバズーカを発射する。

ランド「敵！？」

接近するバズーカに気づいたランドは、パワード・ジム改を飛び上がらせ、マシンガンの銃口をバズーカが飛んできた方向に向ける。

ランド「お、墜ちてくれえええー！」

半狂乱になりながら、マシンガンをドムタイプに向けて撃ちまくる。

ドムタイプは、建物の影に隠れ、それをやり過します。

「ラング、『ビ、ビ』なんだよ……」

いつ襲つて来るかわからない敵に、ラングはびくつこでしまつ。

すると、じびれを切らしたかのように、ドムタイプがサーベルを構えて、飛び出してきた。

「ラング、『ひわあつーぐるなあつー』

ラングはあわててマシンガンを撃ちまくる。

しかし、まともに狙つていないうそは、かすりもしない。ドムタイプは好機とばかりに、サーベルを構え接近してくる。

ラングは当たらないマシンガンを撃ちまくる。

「ラング、『い、嫌だ……死にたくない……死にたくないよ』

ラングは泣きそうになりながら、機体を動かすのをやめてしまつ。

ラングの頭の中では走馬灯の様に今までの思い出が浮かんできていた

そのなかでとある記憶を思い出すラング

「ラング、『（）れつて……あの時の……』」

それはラングが連邦軍に入るきっかけになつたある記憶だった。

ランド「・・・死ねない・・・」

ランドはポツリと呟く。

そして、サーベルが胴体に迫る瞬間だった。

ランド「こんなことで、

死ねるかよおおおおーー！」

ランドは叫びながら、パワード・ジム改を左に、緊急回避をせざる。

ドムタイプは、振りかぶったサーベルをかわされたことにより、バランスを崩す。

ランド「貰つたあああーー！」

マシンガンを投げ捨て、パワード・ジム改は右手にビーム・サーベルを抜く。

そして、振り向いたドムタイプに向かって、頭から一直線にビーム・サーベルを降り下ろした。

ドムタイプは、何の抵抗も出来ずに、真っ二つにされ、爆発する。

ランド「はあっ。はあっ・・・や、やれたのか！？」

ランドは荒い息をしながら、その場に立ちはぐいていた。

すると、近くにいたジム改から、通信に入る。

連邦パイロット2「そこの機体。空いているなら、指令部の防衛に

来てくれ。、ドムタイプが数機接近してくるらしく……」

ランド「わ、わかりました」

未だ混乱しているランドは、とりあえず指令部へと向かうのだった。

連邦パイロット③「くそーすばしつここんだよー。」

辺りをホバーで滑りまくるドムタイプに連邦のモビルスーシ隊は苦戦していた。

連邦パイロット④「弾切れ！？ヤバい。早く・・・う、うわああああああああああああー！！！」

リロード中を狙われ、ジム改はバズーカの直撃を受け、撃破される。

連邦パイロット④「くそつーなんなんだよこいつらあー！」

別のジム改がすかさずバズーカを撃つがドムタイプは軽くかわす。

連邦パイロット④「くそくじょつー来るなあー！」

ジム改は、続けてバズーカを撃つが、ドムタイプは、軽くかわし接近してくれる。

ドムタイプはサーベルを抜き、構える。

連邦パイロット4「へへおおおおーーー！」

連邦パイロットが叫び、ドムタイプが振りかぶった瞬間だった。

? ? ? 「うわあああああああああーーー！」

ズドドドドドドド

空から、弾が降り注いだ。

ドムタイプは、避けるまもなく、蜂の巣にされ、ズシンと重い音をさせ倒れる。

連邦パイロット4「な、何が！？」

連邦パイロットが驚いていると、1機のジムタイプが降りて来た。

連邦パイロット4「た、助かった・・・感謝する」

ランド「い、いえっ！ ランド・シユバイツ准尉！ 援護に参りました。

」

連邦パイロット4「ああ、敵はいまだに基地に侵入してきている。かなりの数だ。ガンダムの奪還も大事だが、基

連邦パイロットが言い終わる前に、バズーカの弾頭が飛んでくる。

連邦パイロット4「ちつ！ とにかく迎撃するぞ！」

ランド「う、了解です！」

「ラングは荒い息をしながら、敵を探す。

ラング「（頼む・・・来ないでくれー）」

しかし、無情にも敵はやつてくる。ドムタイプが3機だ。

ラング「うわあっー何で来るんだよ・・・そんなに無駄死にしたいのかよおおおおーー」

ラングは狂ったようにマシンガンを撃ちまくるー。

ラング「当たれ・・・当たれ・・・当たれ・・・当たっててくれえええーー

偶然にも、マシンガンがドムタイプの足に当たり、ドムタイプはバランスを崩し倒れる。

相当なスピードだったのか、そのまま滑り、辺りの建物に突っ込み、爆発する。

ラング「やれたつーつ、次だ！」

連邦パイロット4「みづじ、全機撃ちまぐれーー

号令と共に、指令部周辺にいた3機のジム改が1機のドムタイプに向けてマシンガンを撃ち始める。

3方向からの攻撃で、ドムタイプは蜂の巣にされ爆発する。

連邦パイロット5「やった・・・つーー

しかし、喜ぶ暇もなく、接近したドムタイプに撃破されてゆく。

連邦パイロット「誰か・・・誰かたすけつ・・・」

悲鳴と共に、3機のジム改は撃破される。

「ハンド」「へやおつー！」までなのか！」

「？？？」「はつー墜ちなー！」

渋川と共に、デムタイプのよこからマシンガンの弾が飛んでくる。

デムタイプは、こきなりの攻撃で反撃出来ず、撃破される。

カレンント「これで全部か・・・」ちらカレント。無事か？」

「ハンド「た、隊長！」

カレント「んつ～。ハンドじゃねえか？何でそんな機体に・・・」

「ハンド「あつ・・・いろいろありますて・・・」

「ハンド、もう一機ジム改が接近してきた。

「？？？」「おこおこ。落ちこぼれラングじゃねえか。なんだ、生きてたのかよ。」

ジム改から、見下すような声が聞こえてくる。

「ハンド「やの顔・・・アストンか！？」

アストン「ああ、ヒーローのアストン様だ。俺は既に2機の『ミル

もを撃破してゐるんだぜ。」

ランド「はんつ、威張りやがつて！」

アストン「うるせえ！落ちこぼれはさつと帰りな！邪魔なんだよ！」

2人が口論をしてゐると、見かねたカレントが仲介に入つて來た。

カレント「てめえらいい加減にしゃがれ！戦闘中なんだぞ！」

ランド「わ、わかりました。すいません・・・」

アストン「ちつ、了解」

カレント「よし、敵はおそらく逃げ帰つたんだ。情報が入り次第、  
ガンダム2号機を追うぞ！」

ランド「了解です」

すると急に、  
ヒュルルルルルル  
と言つ音がなり・・・・・・・・・・・・指令部が派手な爆  
発により吹き飛んだ。

ランド「なつー！」

指令部の瓦礫が降つてくる。

カレント「ちつー逃げろ！」

全機は、いそいで、指令部から離れる。

瓦礫が降つて来るものも、何とか全機無事だった。

ランド「な、なんなんだよ！これ！？」

ランドの皿の前には、完全に崩れた指令部がある。

カレンド「重モビルスーシカ・・・派手にやつてくれるな。」

ランド「ちくしょう・・・指令部が」

アストン「全く、派手にやつてくれるよなあ」

ランド「なんだよその態度は！？人が沢山・・・沢山死んだんだぞ  
！？」

アストン「で？？」

ランド「お前なあつ！」

ランドは激しい怒りを露にしている。

カレンド「ちつ、落ち着け。アストンがビリ思おうがビリでもいい。  
いいな？」

ランド「くつ・・・わかりました。」

ランドは渋々納得する。

アストン「了解・・・ま、そう言つ事だ。さつさと追いましょうぜ。」

カレント「ああ。だが、情報があ

すると、通信が入つてくる。

オペレーター「バーニング小隊が、ジオンの輸送機を撃破。敵は海岸沿いです。カレント小隊は至急向かってください。」

カレント「わかった。カレント小隊。行くぞ」

アストン「了解」

ランド「了解です（バーニング小隊つて・・・）ウ達か？無事で居てくれ。ただ・・・それよりも、アストンは何か・・・」

ランドは、アストンのジム改を睨みながら、出発するのだった。

（？？？）

1人の男が、もう1人に何か報告をしている

？？？「予定通り、奴らが動き出しました。閣下」

？？？「うむ。我々の理想のため、そして地球圏の未来・・・のためにな」

そういうつた男の顔は薄い笑いを浮かべていた。

## トロントン基地攻防戦（後書き）

相変わらず駄文ですいません m(—) m  
これから、テストがありますので、更新遅れます m(—) m  
あと、モノアイガンダムズから、すこしパクリます。  
といっても、変わらず駄文からは変わりませんが・・・  
あと、主人公の機体がジムタイプばかりなのは・・・自分がジム  
ガンダムだからです？

もし良ければ、これからも生暖かい日をお願いします m(—) m

## 霧の中の攻防（前書き）

更新遅れていますへん^（ーー；）^  
補習をかけたテストの最中でして?  
短いですが、とりあえず更新だけしようと思ってます。

## 霧の中の攻防

ガショーン・・・ガショーン・・・

4機のモビルスーツが、霧に包まれた海岸線を進む。視界は悪く、目の前を歩くジム改がわずかに見える程度だ。

ラング「な、何も見えませんね・・・」

カレント「ああ、ここの霧じや あなた」

カレントは、露骨に機嫌を悪くしながら言った。

カレント「バーニングの奴がくまさえしなけりやな」

事を知つていいのラングは、さりげなくフォローを入れる。

ラング「今さら愚痴つたつてしようがないですよ」

アストン「実際やうじや ねえか。ま、新米少尉どのはじや、ガンダムを乗りこなせる訳ねえか」

アストンが、火に油を注ぐような事をいつてしまつ。

ラング「アストンーお前なり、2号機を止められたのかよ?..」

アストン「ああ、余裕でな。主席の俺にかかりやあ、ひやつひやと片付いてるよ」

アストンは、何かと仕官学校の時の話を持ち出し冗談をしてくる。

ランド「「ひめやこー」」これは実戦なんだ。模擬戦とは違うんだよー。」

アストン「ほん。俺は将来連邦のトップに立つんだ。実戦なんか余裕さ」

ランド「お前！」

カレント「黙りやがれ！ 敵さんがすぐ那ノマド來てるかも知れねえんだぞ！」

見かねたカレントが仲裁に入ってくる。

ランド「あっ！」了解しました」

アストン「はいはい。わかりましたよ（このロートルが）」

2人は渋々了承し、辺りの警戒に移る。

視界は、悪く、レーダーまでもが使えない。  
ミノフスキーパーティクルが散布されているのだ。

ランド「ビニだ・・・ビニにいるんだよ・・・」

ランドは、まだ怯えている。

見えざる敵というものは、誰でも怖い物なのだ。  
それが、新兵なら、尚更である。

アストン「・・・・・・・」

さすがのアストンも黙つている。

カレント「提[示]連絡。」こちらカレント。霧は深くなる一方だ。・・・・・・・くつ、バーニングのスケベやわらじ手柄をわたすかよー。」

カレントがぼやく。  
その瞬間だった。

ジユワッ

と、いつ音がなり、1機のジム改が倒れる。

ランド「て、敵！…ビコだつ！？」

辺りを見回すが、敵の姿見えない。

カレント「ハンドー！後ろだ！！」

ランド「えつー・ひわあつー・」

ランドはあわてて振り向く。

すぐそこまで、2号機がビーム・サーベルを構え接近してきていた。

ランド「ぐ、ぐわおつー！」

ランドはビーム・サーベルを構えようとする。

しかし、2号機のタックルによつて、手にしたビーム・サーベルを落としてしまつ。

ランド「嘘だるーーー」んなあつーーー！」

武器を無くしたパワード・ジム改に2号機は、切りかかる。

カレンント「くわやわうがーー！」

カレンントのジム改が、2号機にタックルを仕掛ける。のけ反つた2号機は、一回下がり、ビーム・サーベルを構え直す。

ラング「た、隊長」

カレンント「ラング。生きているか？」

ラング「な、何とか」

ラングは震えながら、それに答える。

カレンント「アストン・ラング！援護しろ！」

カレンントはやうごうと、ビーム・サーベルを構え、2号機に迫る。

アストン「まじよ」

ラング「解ー！」

パワード・ジム改とジム改はマシンガンを構え、2号機に向かって撃ち始める。

2号機は臆するだけでなく、巨大なシールドでそれを受け止める。

マシンガン」ときでは、傷をつける事すら出来ない。

「ラング「なんだよあのシールドー!?」

ラングが、わめいている内にカレントが懐に飛び込む。

カレント「頂いたぜ!!」

ビーム・サーベルを構え、2号機に向かつてふりおろす。  
誰もが勝利を確信していた。

しかし、2号機は、大型スラスターをジム改に向かつて、噴射した。

カレント「なつーしまつ

カレントの視界が見えなくなり、一瞬怯んだ時だつた。  
ビーム・サーベルが一閃し、ジム改の胴体を切り裂く。

ラング「カレント隊長おおーーー!」

ラングの絶叫と共に、ジム改は、爆炎をあげながら倒れる。

ラング「つ、嘘だろ? 隊長が・・・そんな・・・! ?」

ラングが衝撃を受けている間に、2号機はビーム・サーベルを構え  
接近してくる。

ラング「く、くそつー!」

何とかビーム・サーベルを出し、それを受け止める。

ジジジジジジジジ

お互に、ビーム・サーベルで鍔迫り合つをする。

しかし、出力で劣つてゐるのか、次第に押されていく。

「アーリーのアーリー」

アストン「援護してやるよ」

いつの間にか2号機の横合いに回り込んでいたア斯顿が、2号機に向かってマシンガンを発射する。

「今だ！」

2号機が怯んだのを見計らって、ランドはパワード・ジム改を飛び上がった。ま

Nº १

ランド「！？ヤバイつ」

あわてて避けようとするも、反応仕切れず、両足を切られてしまう。

ハンスを崩したハーリー・シム改は、そのまま地面に落ちた。

「アーティスト」の意味

ランではそのまま意識が遠退していくのを感じていた。

? ? ?

？？？「閣下、今のところは、すべて予定範囲内で進んでおります。

」

？？？「・・・順調なようだな・・・それでコーワンも終わりだ・

・・ハフハ」

## 霧の中の攻防（後書き）

相変わらずの駄文ですいません>（――；）<

次回は、ネタバレかも知れませんが、コウゾモンシアならぬ、ラ  
ンドゾモンシアを書こうと思ってます。

テストの最中なんで、また更新遅れます>（――；）<

## 出撃アルビオン（前書き）

「メントいただき、嬉しかったので衝動書きしてしまいました?  
資料がなく、つい覚えた記憶でかいたので、間違いまみれだと思います?」

あと、良ければ「メントお願いします^\_^(ーー;)^\_」  
必ず答えて、少しでも改善していくりますので?

## 出撃アルビオン

「ランド」「う・・・」  
「は・・・？」

ランドが畠をさますと、眼前にはテントの天井が広がっていた。

キース「お、畠さましたか」

ランドは、若干痛む頭を抱えながら、キースに向かつて話しかける。  
ランド「キース・・・俺は何で・・・あつ！2号機に負けて！2号  
機はどうなったんだ！？」

すると、キースは途端に表情を曇らせながら、話始めた。

キース「2号機は核弾頭」と盗まれたよ。俺も「コウモ、バーニング大  
尉まで何も出来ず負けたんだ」

ランド「…? ば、バーニング大尉がか？ 何て奴だ・・・」

いくら機体性能が違うとはいっても、基地のN.O.・1が簡単に負けるなどとは思えないのだ。

すると、キースは先ほどよりも、さらに暗く、怯えた表情になつた。

キース「だつて・・・だつてよ・・・」

ランド「お、おいー？ 何があつたんだ！？」

キースの怯えように、ランドも動搖してしまつ。

キース「2号機のパイロットは、あの『ガトー』なんだぜ」

ランド「ガトー…………つそだろーガトーつて、まさかソロモンの悪夢『アナベル・ガトー』……」

ランドは今までにない程の声を張り上げる。

『アナベル・ガトー大尉』

ドズル中将貴下、宇宙攻撃軍所属。

ジオンがソロモンから撤退する際、専用のリックドムを繰り多数の戦艦、モビルスーツを撃破した事により、両軍から、ソロモンの悪夢と恐れられたエースパイロットである。

ア・バオア・クー戦以降の消息は、不明である。

キース「ああ、あのガトーさ。お陰で基地の戦力はズタズタさ……生きてるのが不思議過ぎるぐらいだよ。あのガトーとやりあつたつてのにな……」

ランド「（2号機のパイロットがガトー！？あんなのと俺は戦つたのか！？俺、いきてるよな！？夢じゃないよな！？）」

ランドはそう思いながら、頬をつねる。

「ランド「いやえつ……ゆ、夢じゃない……俺は……生きてるんだ……！」

キース「お、おい。いきなりどうしたんだよ？ 気でも狂ったのか？」

「ランドの突然の奇行に驚き、キースはそう訪ねる。

「ランド「い、いや。大丈夫さ。生きてるのを喜んでるだけさ。」

キース「そつか……そつかよなー！」

「ハハハハ」と2人で笑い合いつ。

キース「ん？ 何か忘れてるような……あーっ！ 早くバーニング大尉に知らせないと！」

キースは突然立ち上がる。

「ランド「な、なんだ？」

キース「ハウとモンシア中尉……補充兵が戦ってるんだよー？」

「ランド「ぶつー？ な、何でー？」

あまりにも突拍子すぎて、ランドは吹いてしまひ。

キース「1号機のパイロットの座をかけてだよー？ 本当は大尉探してたんだけど、お前が目を覚ましたから。俺、バーニング大尉探してくる」

ランド「あ、ああ、わかった」

そう言ひて、キースは飛び出して行つて、しまつた。

ランド「『ウだつてガトーと戦つたのに、俺は向でまだ・・・俺  
だつて・・・やれるよな?・?・?」

ランドは何かを決意しけながら、モビルスーツのハンガーへと向  
かつた。

ランド「よし・・・今だ!」

整備兵がいなーのを確認して、パワード・ジム改の「クピットへと  
走る。

整備兵「お前?・?・?何をしてるんだ!-?」

ランド「ヤバい!・気づかれた!」

ランドは急いで、パワード・ジム改のシートに座ると、機体を起動  
する。

ランド「えーっと、・?・?敵影が見えたんですよ。偵察に行き  
ます!-!」

このセリフが後の問題児と被るとは、ランドは夢にも思わないであ

れい。

整備兵「おい、待つ」

整備兵が言い終わる前に、パワード・ジム改を動かし、ペイント弾とシールドを掴み、ハンガーを出る。

回りに人がいないのを確認すると、バックパックを吹かせた。

ラング「うぐぐっ！な、何で推力だ！！」

ジム改の比ではない推力に戸惑うラング。

ラング「ま、前はそこまで使わなかつたからな・・・模擬戦か、行くとしたら・・・試験場だな」

ラングはパワード・ジム改を、試験場へと向かわせるのだった。

ラングが出てこいつてすぐには、ハンガーの整備主任がかえってきた。

整備主任「おい、ここにあつたジムタイプビデオした？」

整備兵「それが・・・偵察にでるつて・・・」

整備主任「なんだ？まだ足が直し掛けなんだぞ！ショック・アブソーバーももう替えがないのに・・・壊すなよ・・・」

整備主任はそう祈るしかなかった。

「ラング、もうちょっとだ・・・見えた！」

ラングの前方に戦っていると思われる二機のガンダムとジムタイプが、見えた。

ラングは、パワード・ジム改を近くに停めてあるジークのヤマコおろした。

ベイト「なんだこりゃ？」

アデル「ジムタイプのカスタム機ですね」

二ナ「パワード・ジム改・・・誰が？」

ラング「今どうなってるんですか？」

足元に立つ二ナに気付いたラングはそう訪ねる。

二ナ「えっ、ああ、よくわからなーいのよ。残骸の中立てるか？」

ラング「そうですか・・・」

すると、残骸の壁を突き破りガンダムとジムタイプが飛び出してくる。

モンシア「お、俺がまけたのか？」

「ウ「はあっ、はあっ。やれたのか？」

ベイト「モンシアー何せつてんだよー。」

ベイトは呆れた顔をしながら、通信機に話しかける。

モンシア「くそつ、くそつ……おい、そこのモビルスースー！」

ランド「はーつー？」

モンシア「またガキか！俺がガキに負けるわけが……おい、俺と勝負しろーー！」

声から、まだ若いと悟ったのか、モンシアは勝負を吹っ掛けてくる。

ランド「ええつー？そんなー？」

モンシア「うるせえ」

モンシアは怒りに任せて、マシンガンを撃つてくる。

ランド「避け……れるかよーー！」

足元の3人を庇い、シールドでペイント弾をうける。

ベイト「モンシアあーあぶねえだろー。」

モンシア「うるせえんだよおおおおーーー！」

モンシアはさらばマシンガンを乱射していく。

「アーティスト」

モンシア「ああつ？」

何かのスイッチが入ったのか、ランドは絶叫しながら、パワード・ジム改をジムタイプに突っ込ませる。

モンシアー何しに！早し！」

思ひもよらず、高機動なハフニエ・シム改にサンシアは驚きを隠せない。

モンシアーだがな、単純なんだよ。新米」と机にやられるか！」

シムタイノはハーリー・シム改の攻撃を横に軽く受け流す

「ノルマ」

体勢を崩したバーダー・ジム改[ジムタイフは好奇とはかりに]マシンガンを撃ちまくつてくる。

「え、これ何だ？」マシンガンか！？」「

マシンガンにペイント弾があれば、パワード・ジム改は、マシンガンを落としてしまう。

モンシア「バカが。おらおらあーー！」

ジムタイプは、攻撃の手を緩めず、接近してくれる。

シールドでうける」としかできないパワード・ジム改は、次第に追い込まれて行く。

ラジオ・ラジオ・ラジオ・ラジオ

ランデは敗北を覚悟し、うつむく

モンシヤー 新米か！情けねえなあ？何で軍人になつたんだよ！」

レバノンの政治情勢

やけくそはなりながら ハーフト、シムズを飛ひ上がらせる

モントレーラル

ジムタイプもあわててマシンガンを撃つか、パワード・ジム改の推力についていけない。

「アントン、さあおまかせ——」

ラングは絶叫しながら、パワード・ジム改を・・・・・・・・・ジ  
ムタイプ二足から落っこちる。

高高度からの落下の衝撃はすさまじく、ジムタイプの胴体がひしゃげる程だ。

ランド「今だ！？」

隙ができたジムタイプのマシンガンを奪い取り、ジムタイプに突き付けた。

モンシア「いててっ！……何つ！また俺がまけたのかあー？」

モンシアは愕然とし、ジムタイプのレバーから手を離した。

ランド「はあっ、はあっ、や、やれた……のか？……あ……あ……」

ランドはもはやまともに喋ることすら出来なくなっていた。本気の戦闘の恐怖に怯えきってしまったからだ。

あたり一面が、静寂に包まれる。

バーニング「お前らー何をしている」

その静寂を打ち碎くかの様に、バーニングの怒号が響く。

「ウ「た、大尉！」

バーニング「全く……おい、お前らは基地に戻れ！後の事は俺に任せろー

全員「はい……」

そして、全員は基地へと戻るのであった。

ハリダ「一週間の独房入りだよ。いいね?」

「ウ「はー」

「ウサセウツヒツヒ、独房にはこる。

キース「ウ・・・」

キースが心配そうにウをみる。

ハリダ「わうだ。君は、追撃部隊に志願するのかい?」

ハリダは、ランドに対して、聞いてくる。

ランド「俺は・・・志願します。独房にも入ります。」

ランドは真剣な顔をして答えた。

ハリダ「わかった。手続き等の書類は後で持つてくるよ。同じく一週間だよ。」

ハリダは淡々と告げた。

ランド「はい。」

そう言つて、ランドも独房へとはこる。

ランド「(俺にだつて・・・やれる事があるはずだ・・・)「

「ハンドせぬつと思ひながら、ベッドへと寝転がふのだった。

この日、強襲揚陸艦アルビオンは、アフリカへと出発した。

## 出撃アルビオン（後書き）

駄文度8割増しですいません>（――；）<  
次回は、アフリカでのジオン残党との戦い・・・の予定です。  
本当は10機しか敵機はいませんが、少し増やします。  
テストと補習があるので、かなり更新遅れます>（――；）<

## 遭遇（前書き）

更新遅れてすいません>（――・）<  
結局補修になってしまいまして？

かなり急いで書いたので、いい加減になつてゐるかも知れないです。  
ご指摘、感想あれば遠慮なくください・・・むしろ、遠慮なんか捨て  
てて、何でもいいのでコメントお願いします?  
かならず返信いたしますので>（――・）<

## 遭遇

アルビオンがアフリカを日指して、早一週間。未だに、何も進展がないまま、時は過ぎ去つていくのであった。

「ラング……今日も進展無し、と」

ラングが夕食を食べながら、やつ齒く。

アストン「たべよ。こいつになつたりみつかんだよー。」

アストンもそれに答える。

「ラング「まあまあ、落ち着けよ。」

ラングがそれをたしなめる。

アストン「つるせえー」「んなことなら、志願すんじゃなかつたよー。」

アストンは机を呑へと、そのまま食堂を出てこいつてしまつ。

「ラング「（じやあなんで志願したんだよ……）」

「ラングは心の中でやつ思ひつい。

実際、アストンが追撃部隊に志願したのは驚きであった。

エリーの家計で、高い操縦技術を持つアストンなら、志願などしなくても良いはずなのだ。

「ハンド」(まひ、Hリード)も何を考えてるか解らないしな……」

特に気になる事もなくハンドはそのまま夕食を再開したのだった。

「ハンガー」

損傷したモビルスーツや、改造途中の機体を前に、モーラが整備員に声を掛ける。

モーラ「パワード・ジム改はF系のパーツを流用して……」

そこに偶然やつて来た二ナが、声を掛ける。

二ナ「モーラ。偵察機なら、さらにスナイパーのスコープも取り付けたら? 倉庫からもつてきたんでしょ?」

二ナの提案にモーラが飛び付く。

モーラ「そりゃいいね。改造しがいが有るよー。」

モーラが笑顔でそう語るが、整備員の顔は、げんなりとしている。

整備員「主任、これじゃガンダムの為のデータとれませんよ?」

改造しそうたパワード・ジム改に対して、整備員が口を出す。

モーラ「データもなにも死なれちゃまないでしょ？ベースが貧弱なんだから、少しでも強化しないと。」

モーラの最もな提案に整備員も黙る。

モーラ「ああて、今夜は徹夜だよ。いつ敵が来るかわからないんだからね。」

整備員一回「（マジですか・・・）」

二ナ「せどせどこ頑張つてね。あたしもガンダムの整備しなきゃ

二ナも、血のガンドムの整備を始める。

「ひして夜はふけて行くのであった。

～次の日～

シナプス「ランド准尉。直ちにブリッジへ来ててくれたまえ。」

「ランド」「ふえっー。」

未だ自室で寝ていたランドは、呼び出しの通信で目を覚ます。

ランド「ふあ～・・・着替えて行くか・・・」

眠たい目を擦りながら、ランドは着替え、ブリッジへと向かつた。

「ランド、シナップス艦長、何が用でしようか？」

そつまつて、ブリッジへに入る。

シナップス「うむ。ここから先は、ジオン残党がうひついていふと言  
われている。そのため、偵察を出せねばならんのだ。船は、パワー  
ド・ジム改ででてくれたまえ。」

ランド「了解です。しかし……」

何か分の悪い顔をするランドに対し、シナップスは、悟ったよう  
にうなづく。声を掛ける。

シナップス「朝食の後で構わんよ。すでにウラキ少尉も出てこるので  
な。多少の余裕はある。」

ランド「あ、ありがとうございます、艦長。失礼します。」

ランドは、朝食を取れないといつ不安をなくし、ホッとしながらブ  
リッジを後にするのだった。

アストン「ラングー。偵察だつて？ま、お前にはそれくらいしか出来ねえよなあ。ハツハツハツハ。」

朝食を終え、ハンガーへと向かうラングーにアストンが茶々を入れてきた。

「ラングー、ついでかい。偵察だつて大事なんだよ。」

アストン「はいはい。ま、頑張れや」

アストンは聞く耳持たずといった感じで、立ち去る。

ラングー（アストンの奴ーいつか仕返しを・・・無理か・・・）

早くも諦めながら、ラングーはハンガーへと向かうのだった。

「ハンガー」

「ラングーおこおこ・・・」

ラングーはあきれながら、白いが乗る機体を見上げていた。

モーラ「お、ラングー。どうだい、この機体は。」

モーラは自信満々にパワード・ジム改を見上げる。

「ラングー、いや、どうって言われても・・・」

ランドは口を濁す。

それもその筈だ。

パワード・ジムの頭には、ジム・スナイパー？のスコープがつけられ、胴体にはウヨラブルアーマーがつけられ、足のショックアブソーバーも変わっていたのだ。

「ランド……」

ランドは言葉を失つ。

モーラ「まあ。とつあえず乗りな。出撃するんだろ？」

「ランド「あ、はい。」

訳もわからぬまま、ランドはパワード・ジム改に乗りカタパルトに立つ。

モーラ「あ、そうだ。足はホバーだから、操縦気を付けなよ。」

「ランド「えつ、ホバーって……」

ランドが言い終わるまえに、カタパルトによりパワード・ジム改は射出された。

「ランド「ぐおおおー！」

射出されたパワード・ジム改は、荒野に着地する。

「ランド、ふう。ホバーって……とつあえず進むか。」

言われた通りホバーのスイッチを入れ、進もうとする。

「ランド、うわわっ！」

慣れない動きに、転倒してしまった。

モーラ「氣を付けなよ。機体を少しまえに、倒すんだ。」

「ランド、わ、わかりました。」

モーラの助言に従い、機体を少しまえに、倒す。

「ランド、うわっ、早い！」

パワード・ジム改は地面を滑るまゝに進む。

「ランド、こいつはいいぞ！ まるでドムだな……」  
「向かいます。」

シモン「了解。氣をつけ

通信を終えると、さらに加速し、対にはアルビオンの視界から、消える。

「ランド、敵機は無し、と。」

辺りを見渡すと、レーダー類の計器をチエックする。レーダーにも、機影は確認出来ない。

その時だった。

ピーチ、ピーチ

アラートが鳴り響いた。

ラング「敵！？ 9時方向から。」

9時方向・・・左から、バズの弾頭が接近してくれる。

ラング「！」  
「ちりりラング、敵と遭遇しました。・・・ザク2、ドム2機！ ヤバいです！ 早く援護をつ！ ！」

シモン「准尉！ 直ちに増援を送ります！」

ラング「了解！ ぐそおつ！」

シモンとの通信を終えると、敵機に向かって、マシンガンの牽制射を行つ。

それを軽くかわした敵機は、マシンガンを連射しながら、接近していく。

避けながら、シールドで受けれる。

ラング「消耗戦になつたら負ける・・・どうすればいいんだよな？ ・・・」

トコントンの時のよつて、パニックを起しあけてしまつ。

ランド「・・・違つ・・・あの時とは違うんだ! 覚悟だつては  
すなんだ!」

吹つ切れたランドは、パワード・ジム改を滑らせ、接近してきていた敵機に向かわせた。

ランド「うわああああああーーー!」

マシンガンを腰に付け、ビーム・サーベルを両手に構える。そのまま敵機に向かって、突っ込む。

マシンガンが当たるが、ウェーブラブルアーマーのお陰で、立った外傷は見えない。

ランド「これでーー!」

接近してきていたザクとドムが、止まり、下がりかかる。その間に入り、左右のビーム・サーベルで2機の胴体を切り裂き、通り過ぎる。

真つ二つになつた2機は、切られた衝撃で地面に倒れ、爆発する。

ランド「い、今ならー当たれー!」

右手のビーム・サーベルを捨て、マシンガンを構える。

「ひりを向ひひじ、していざクに向かつて、マシンガンを発射する。

ザクは蜂の巣になり、倒れる。

「ランド、や、やれ……」

「ランドが言い終わる前にもう一機のドムが切りかかってくる。」

「ランド、ーーくそおつーあたれえつーーー！」

切りかかろうとしているドムに向かって、とにかくマシンガンを超至近距離で打ちまくる。

マシンガンで蜂の巣にされたドムは、サーベルを落とし倒れる。

ランド「はあー、はあー、やれた？ 4機を相手に？ マジか？ 僕、生きていめるのか？ ……やつたああーーー！」

ランドは、自問自答の後、とにかく喜んだ。『生きている』これ以上に嬉しいことは人にとってない。当然だ。

パワード・ジム改がハンガーに入る。

ランドが降りると、回りにいた人が駆け寄つてくる。

キース「すげえよー戦果4だぜ」

「コウ「ああ、しかも相手はドムだぜーあの重モビルスーツを相手にして。」

皆が喜めちぎつてくる。

「ランド、あ、まあな。」

ランドも満更ではなかつた。

シナップス「ランド准尉。直ちにブリッジに来てくれたまえ。」

朝と同じ放送が流れ、ランドは再びブリッジへと向かつた。

～ブリッジ～

シナップス「戦果4。おめでとう。」

シナップスは素直にランドの戦果を讃める。

「ランド、あ、ありがとうございますー。」

「ランドも素直に喜ぶ。」

すると、シナップスは顔をしかめながら語りだした。

シナップス「敵は確かにここにいるようだ。一刻も早く2号機を見付  
けねばならん。君にも、更に偵察、戦闘を強いることになる。」

シナップスは、静かにそう語つた。

「ランド、・・・わかつてます。志願するときこの覚悟をしたはずです  
から・・・」

「ラングも静かに心づ返答をすむ。

シナプス「そつか。とつあえず休憩をとつたまえ」

ラング「了解です。失礼します」

シナプスの好意を素直につか、ラングはブリッジを出す。

ブリッジを出たといふとモンシアが声を掛けてくれる。

モンシア「覚悟つてのせやんな簡単に決まるもんじやないぜ。よく  
考えるんだな」

いつものいい加減さを全く感じない。しゃべり方をすると、モンシ  
アは立ち去つてしまつ。

### ～ラングの匣壁～

暗くしてある部屋のベッドにモンシアが寝そべつている。

「ラング」（覚悟せ・・・・・やめてるはずだ。じゃなきや・・・・）

モンシアの呪詞を思い出しながら、訝然としながら、モンシアは黙  
りに付くのであつた。

## 遭遇（後書き）

・・・ジムなの、強化しそうもましたね？

まあ、懲りずに強化しますが（・・・・・）b

アイデアなどありましたらお願いします^\_\_^――・・・^

自分は全く創造力がなくて？

コメントくれた方々、本当にあつがとうございますm(――)m  
ものすげへやる気がでます！！

馴文ですが、これからもよろしくお願ひしますm(――)m  
あ、これから展開なんですが、このまま、むさい路線でいくか、  
厨一病学生の煩惱の展開を入れるか、迷ってまして？

適当に意見などありましたら、お気軽にお願ひしますm(――)m  
深夜に書いたので、テンションおかしくなつてるのは勘弁してください？

## 荒野への出撃（前書き）

いつも通り、駄文ですが、許してください^\_^(ーー;)^  
ストーリーは、〇〇八三そのまま？ですが、ランドが体験した、星  
の屑のもう一つの真実を書こうと・・・思っています？  
今回も休み前に急いで書いたものなので、内容すっからかんです？  
許してください^\_^(ーー;)^

## 荒野への出撃

アルビオンは未だに明確な情報を得られずに、アフリカ大陸をさ迷つていた。

「ビーツ、ビーツ」

突如艦内にアラートが鳴り響く。

ランド「またかあ・・・」

一瞬艦内に緊張が走るが、すぐにその緊張は溶ける。  
理由は簡単だ。左舷モビルスーシテック、ランドの田の前で、モン  
シア達がモーラと乱闘騒ぎを起こしている。  
内輪もめだ。

ランド「（うわあ・・・モーラ強つ！大の男を投げたつ！）」

最早当たり前と化した、乱闘を見ながら、ランドはため息を吐く。

ランド「いつまで」んなのが続くんだろうなあ

そんなことを考えている間に乱闘は終わり、3人はどこかへ行つてしまつた。

モーラ達も整備に戻つている。「ビーツ、ビーツ」

再び艦内にアラートがなり響く。

ランド「ん？コウがかえつて来たみたいだ・・・うわっ！」

突如、着陸を誘導しているライトが消える。  
コアファイターはそのまま座礁してしまつ。

ランド「やりすぎじやねえか！また中尉達か・・・」

ランドはそのまま「ウヤモンシアの喧嘩を見ながら、今後に不安を感じ、盛大にため息を呟くのだった。

キース「うわあああああああ――」

奇声を発して走っていたキースは、バーニングに当たつてしまつ。

バーニング「どうした！？』

キース「せ、整理現象ですううう～！」

キースはなおも走り続け、アナハイムのエンジニア、オービルにもぶつかる。

オービルのつていた書類が当たりに散らばる。

キースもそれを拾おうとするが、

オービル「大丈夫ですか？ いつでください。気持ちはよくわかりますから。』

オービルの「」の一言で

キース「『』、『』めへん！」

キースは再び艦内を駆ける。

キースが行くと、オービルはあわてて書類を拾い始めた。

オービルはバーニングの接近に気付くと、せつと行ってしまった。

バーニング「全く……ん？」

バーニングが一枚の書類を拾い上げる。

バーニング「こ、これはっ！？」

スコット「コアファイター発進口、開きます！」

突如、1機のコアファイターがアルビオンより発進する。

シナプス「まさか、彼がジオンのスパイだとはな……見失うなよ。

」

シナプスが一枚の書類を手にそう命令を出す。

その書類は、アルビオンの図面であった。

スコット「艦長！ オービルは残党軍にコンタクトを求めています。」

シナプス「うむ、バーニング大尉、モビルスーシ隊発進だ！」

シナプスの号令にバーニングが答え、指示を出す。

バーニング「了解、これで双眼鏡ともおさらばです。モンシア、A小隊。貴様がリーダーだ。、B小隊。ベイトとアデル、ランドで組み待機。」

モンシア「はっ！？じゃ、じゃあ・・・」

バーニング「モンシアはウラキとキースを連れていけ。」

モンシア「大尉！観光旅行じゃないんですぜー！」

バーニング「これは命令だ！」

モンシア「2人も小便小僧はいらねえよー！」

モンシアがあからさまな不満の声を漏らす。  
こんな編成は普通はあり得ないであろう。

キース「しょ、小便小僧！」

コウ「中尉、オムツ持参でお共しますー！」

「ウモジヨークのつもりか返事を返す。

カタパルトに上がったモンシアは、懲りずにサブカメラを使い、二  
ナのスカートを除こうとして・・・

シナプス「射出しつつ……」

モンシア「うおわあっ！」

奇怪な声を上げ、射出される。

アストン「大尉。俺の機体は？」

バーニング「お前のジム・カスタムは整備中だ。だせれん。」

アストン「ちひ、つまんねえの」

アストンは舌打ちをしながらハンガーを出ていく。

ランド「あいつは勝手だなあ」

何て楽なんだね？ ランドはそう思いながら、アストンが出ていくのを見ていた。

バーニング「ランドー・コックピットで待機だ。急げ！」

ランド「は、はい！」

ランドもあわてて、パワード・ジム改に乗り込む。

ランド「よし、やれるぞ。」の機体の性能なら、戦果4も立てるしな・・・

ランドは調子に乗りながら、出撃準備をするのだった。

オービル「どこも同じ用な景色ばかりか・・・ありがたい、出迎えか！」

コアファイターの先に2機のザクが出てくる。  
コアファイターは進路をザクの方向に向ける。  
その時だつた！

ザクはマシンガンを発射し、コアファイターを撃ち落とす。  
オービル「お、俺は味方だあー！」

オービルの叫びもむなしく、コアファイターは爆発する。

3機のモビルスーツが荒野を進む。

「ウ「中尉ーー自半ですー！」

コウが敵機を見つける。

モンシア「そあれ、2人ともぶつかなせー！」

モンシアの滅茶苦茶な指示が飛ぶ。

「ウ「中尉、こんな距離ではあたりつこ有りませんよー。」

コウが必死に抗議するも、

モンシア「ウラキイ、これは命令だあー。」

「ウ「了解しました。」

ウラキとキースは、敵機に向かつてビームを発射する。

敵機の上をビームが掠める。

敵機は、恐れおおのいたのか、後ろへと下がる。

モンシア「そおれ、基地まで案内してくれるつてよー。」

モンシア達は、そのまま敵機を追うのだった。

モンシア達は、なおも逃走する敵機を追っていた。

「ウ「中尉ー左です。」

突如モンシア達の左から、バズーカの弾頭が飛んでくる。

モンシア「くそつー待ち伏せかー。」

3機は、近くの乾いた川後に入り、応戦を始める。

バーニング「くそっ、深入りし過ぎだ！」

バーニングが怒りも露にし、杖で床を叩く。

シナプラス「どうやら、敵はオービルを受け入れなかつたようだな・・  
・モビルスーシ隊発進！敵の基地は初期のオービルの逃走方向だ！」

シナプラスが、バーニングに指示を出す。

バーニング「りょ、了解。ベイト、発進だ！」

ベイト「了解！さーって、行くかな。」

ベイトのジム・カスタム、アデルのジム・キャノン？がカタパルト  
に立ち、射出される。

ランドのパワード・ジム改も、カタパルトに立つ。

ランド「ランド・シュバイツ准尉！パワード・ジム改、行きます！」

そう言つて、ランドのパワード・ジム改も荒野へと飛び出すのだった。

## 荒野への出撃（後書き）

戦闘は次回に持ち越しです^\_^(ーー;)^すこません

さて、いよいよ次回は、ビッター少将の出番です。  
「ハンドをどうぞ」とこぼれこぼれにしましょうか・・・

今別で、地球防衛軍？を書いてるんですが、そっちの用な書き方の方が個人的に書きやすいんですね？

今から変更はまずいでしようか？

意見あれば、お願いします^\_^(ーー;)^

## 熱砂の攻防（前書き）

遅れた上に短く、その上駄文ですいません?  
その代わり、次回はなるべく早く投稿しますので^\_^(ーー・)ー^  
今回は、とにかくランドが惨敗します!!

## 熱砂の攻防

前方から、数機のモビルスーツが接近してくれる。

アルビオンが、先制攻撃で機関銃を浴びせかけるも、軽くかわし、バズーカをアルビオンに向けて発射してくれる。

ランド「いや、ここから…や、やつてやる…。」

ランドはこきり立つて、パワードジム改を突出させる。

ベイト「ランド、何やつてんだー！ここからはプロだぞーー。」

ベイトが注意してくれるも、既に遅く、敵の集中放火に合流してしまう。

ランド「あ、当たつてたまるかー！」

バーニアを吹かせ、上に飛び上がる。

最初のマシンガンはかわせても、敵は直ぐ様上に向かつて射つてくれる。

ランド「く、くわうつー。」

マシンガンが、次々とあたり、機体を守つているウーラ・ラ・ラルマーを剥がしていく。

アデル「ランド。慌てるなつー！敵の動きを見ろー。」

アデルの助言も耳を素通りしてしまつ。

「あ、あ、あ。うわあああああああああああー」

ウェラブルアーマーが剥げるのを見て、ランドは恐怖の余り絶叫をあげる。

そのまま、バー二アを一杯に吹かせ、後方に着地する。

敵のドムの1機をベイトのジム・カスタムが撃破する。

ベイト「流石地元の野郎だぜー！おわつー！」

しかし、ベイトのジム・カスタムは足をやられ倒れる。

アデル「こうも動かれてはキヤノンではつ！」

アデルのキャノンも、敵の動きの速さのせいで、キャノンの特性をいかせない。

敵は好機と見たのか、そのままアルビオンめがけて直進してくる。

「ハアツ、ハアツ。あ、アルビオンがやられる……あのザク・・・指揮官機か！」

一度後方に下がったランドだが、敵の指揮官機らしきザクを見つけ、ザクに向かって、パワードジム改を滑らせる。

「ランド！」、「！」こつをえ倒せばっ！」

マシンガンを捨て、ビーム・サーベルを構えてザクに向かつて斬りかかる。

しかし、ザクはあつさつと横にかわし、直ぐ様マシンガンを射つてくれる。

「ランド！」、「！」

パワードジム改を回避させようとしたバーニアを吹かすも、間に合わず左腕を蜂の巣にされる。

「！」  
「ランド！」、「！」シールド持つてかれた！くそつー何て鈍いんだこいつ

パワードジム改の反応速度に、ランドはそう愚痴るが、実際はそうではない。

普段から、モビルスーツの調整等に付き合つていないので、機体を自分に合つように調整していかないからだ。

「ランド！」、「ま、まだだ！」

再びザクに向かつて斬りかかる。

ザクは、ヒートホークを左手に構え、ビーム・サーベルを受け止める。

「ランド！」、「！」このまま押し込めば！」

単純な1対1なら勝てるだろ？。しかし、ランドは敵が数機いるこ

とを忘れていた。

「ランド、よし、行け……うわっ！」

マシンガンが、パワードジム改を背後から貫く。  
運良く、コックピットをそれ、爆発は防げたようだ。

後ろ手にザクが回っていたのだ。

ランドは、遂レバーから手を離してしまい、ヒートホークで右手を  
斬られてしまつ。

「ランド、ぶ、武器が！」

そのままパワードジム改は足を撃ち抜かれ、その場に倒れる。

2機のザクは、そのままパワードジム改を無視し、アルビオンに向  
かって前進する。

「ランド、た、助かつ」

ランドが安心したのもつかの間

後ろから来ていたザクが、ランドに向かつて斬りかかった。

とつやにバルカンを発射し、怯ませたザクのヒートホークは、コッ  
クピットを外し、パワードジム改の右胸を切り裂く。

「ランド、よ、よし。バルカンでコックピットを狙えば

照準をザクに向かつて会わせよつとするが、突如画面が消える。

「ランド、えつ！？」

ヒートホークはコックピットすれすれまで切り裂き、そのままパワードジム改はパワーダウンしてしまったのだ。

ザクがヒートホークを構え、斬りかかるうどしている音がする。

ランド「止める！止めてくれえつ！嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！…死にたくないつ！！」

しかし無情にもザクをヒートホークをパワードジム改に向かって降ろ・・・せなかつた。

左からのビームにより、ザクが倒れたのだ。

ランドはコックピットから出て、何が起つたのかを見よう・・・とはしなかつた。

ランド「嫌だ・・・嫌だ・・・嫌だ・・・嫌だ・・・誰か・・・誰か・・・誰か・・・誰かっ！？」

ガチガチと子供の様に、膝を抱えそのまま座つていた。

2号機を載せたH-LVが発射され、アルビオンはそれを撃ち落とそうとメガ粒子砲を発射する。

しかし、メガ粒子砲はわずかにそれ、H-LVは宇宙へと飛び出す。

2機のザクはそれを見届けたのか、ブースターを吹かし、アルビオンに肉迫する。

その内1機は、アルビオンの機銃により打ち落とされるが、残る1機。角付きの指揮官機はマシンガンをアルビオンのブリッジに合わせた。

シナプス「へつ！？」

ブリッジの誰もが、死を覚悟しただろう。

カギンツ

サケを一筋のヒームが貫く

二ナ「ウラキ少尉！」

一七〇の1号機がヒューリックで狙撃したのだ。

一九二二年五月

片かの放つた一撃によって、戦闘は終結した。

前方、鉱山基地。

白旗を掲げ、ジオンの軍服を纏つた将兵達が立つてゐる。

コウは、動かなくなつたパワードジム改を回収しようとしながら、それを見つめた。

「ウ「スペースノイド。あれが・・・敵・・・」

？？？？

？？？「ええ、もちろん『成功』ですよ。『予定』通り、2号機は、  
宇宙へ上がりました。」

## 熱砂の攻防（後書き）

いやー、短いですね？

ランドは、とにかくフルボッコにされましたね？  
これから、訓練させまくつて、コウ並の腕にしようかと思つてます。  
ランドの過去の下りなんかも、いつか書ければ・・・と、思つてます。

ランドとアストンの機体の詳細載せますね。

ランド・シュバイツ准尉

パワードジム改（宇宙様）  
RGM-79

武装  
ロング・ライフル

o  
ジムライフル

フォールディングバズーカ  
60mmバルカン砲×2  
ビーム・サーベル×2  
シールド

スペック

ジュネレーター出力 1840kw

装甲 チタンセラミック合金  
ロングレンジスコープ

ガンダムにより近いデータを取る為に、パワードジム（ジム改がベース）のバックパックをより高性能にし、ジュネレーター出力を向上ビーム・サーベルを2本にした機体。  
地上での改修時に、ジム・ナイパー？のロングレンジ・スコープを着けている。

ランドの要望により、反応速度が、ピーキーすぎる程になっている。

アストン・ジーニアス少尉

ジム・カスタム高機動型

武装

ジム・ライフル × 2  
60mmバルカン砲 × 2  
ビーム・サーベル

スペック

ジュネレーター出力 1630kW  
装甲 チタンセラミック合金

ジム・カスタムに大型のスラスターを2個取り付けた機体。  
アストンの高い操縦技術もあり、ジム・ライフルを2丁流にしてシリードをはずしている。

機体設定などは、普通の物

・・・以上ですね。

ネタバレでしたらすいません？

あと、アンケート取りたいんですが、このまま終わるか、ここまで行くか。

良ければ、意見お願いします♪（ーーーーー）♪

あと、批判、意見などありましたら、気軽にお願いします。

## 戦線離脱（前書き）

遅れています。

かぜひいてダウンしてまして^\_^(ーーー)ˇ  
頭が痛むなか、急いで書いたので、間違えだらけなのは勘弁してください。

## 戦線離脱

「モビルスーシテツキ」

モーラ「パワードジム改は、念入りにチェックするんだよ。本当は地上用なんだから！」

モーラは、整備員達に、指示を出し続けていた。

モーラ「・・・はあ、全く1週間で偉い進歩だねえ」

コウ「バランスおかしいや」

二ナ「ああ、勝手にさわらないで。」

コウ「僕だって計算したんだ。1号機は宇宙でもやれるぞ」

どうやら、1号機の調整を『2人で』しているようだ。  
やがて、二ナはコックピットを離れて行つた。

二ナ「計算、間違ってるわよ」

コウ「ええ！？」

「ウは再び計算に頭を悩ませる事になつてしまつた。

「ブリッジ」

2号機を追つて宇宙に上がり早1週間、サラミス級戦艦、コイン、ナッシュビルと合流したアルビオンだったが、アフリカでの戦闘以来、ランドは部屋に閉じ籠もる事が多くなってしまった。

その上、以前のような操縦も出来ず、偵察の任からも外され、ますます落ち込むようになっていた。

シナプラス「ランド准尉の事だが……どうしたものか……」

シナプラスも思案にくれていた。

バーニング「艦長、ランド准尉はまだ若いのですから。むしろ、今までの戦闘でおかしくならなかつたのが異常なんです。直ぐに立ち直りますよ。」

シナプラス「そうだと良いがな……」

今まで数々の兵士を見てきたシナプラスでも、どうすればいいのかはわからないのであつた。

（食堂）

キース「ランド……大丈夫かなあ」

引き込もうとしたランでしまったランで対して、キースも心配なようだ。

「ウ「そうだな……人參要らないよ……うわっ！」

相変わらず人参を沢山入れられたようだ。  
席を探していると、二ナを見かけて、コウは声をかける。

「コウ、「ここまで計算絞れたんだ！」

二ナ「食事中よー。」

コウ「な、なら人参あげるよ。」

二ナ「そういう事じゃないわよー。」

何か機嫌を損ねたのか、二ナはそのまま怒ったままだ。

そこへ、問題児モンシアがやつて来てしまった。

モンシア「二ナさん。」<sup>こ</sup>無沙汰ですいませんねえ

二ナ「ガンダムは中尉に乗つてもらつた方が良いかしら・・・」

相変わらずモンシアが二ナに詰め寄つていると、二ナがどんなにもない事を口走つてしまつた。

「コウ、二ナのわからず屋が！」

そのまま、コウは走り去つた。

モーラ「バカだねえ」

二ナ「べつに良いのよ。」

モーラの注意も、二ナの耳を通り抜けるだけだった。

「ピーツ、ピーツ、ピーツ」

シモン「敵戦闘艦接近、各員戦闘配置！」

モンシア「よおし、いくぜ」

ベイト「旧式のゲルググなら楽なもんだ。」

発進したベイト達は、敵の機体が旧式だと知り、調子に乗っている。

アストン「この機体の初陣なんだ。逃がすかよ・・・」

アストンのジム・カスタム高機動型が敵を追い詰める。

～ブリッジ～

突如、通信に割り込んでくるものがあった。

？？？「・・・・・・・・我々は・・・デラーズフリート！」

かつてギレン・ザビを信仰していた将校である。

～ランドの部屋～

「ランド」（俺は何をやつてるんだ……）

戦闘配置の命令を聞きながらも、出撃出来ずにいるランド。アフリカでの恐怖が、ランド脳裡に浮かんでいるのだ。

「デラーズ、我々は……」「デラーズフリー」

突如、ランドの部屋のモニターの画面が付く。

「ランド、『デラーズフリー』……？」

ランドが画面を見ていると、デラーズは淡々と語る。ジオン再興、連邦の軍事違反、そして、2号機が映る。

「ランド、！？あれが使われたら……また、沢山の人人が死んでしまう……それだけはっ！……くそおおっ！……」

ランドは、パイロットスーツに着替えると、一目散に駆け出し、モビルスーツデッキへと向かうのだった。

～モビルスーツデッキ～

「ハンドルはあはあ、モード、機体は？」

モーリー「ハハハ……今それビックリかじやなこの一ウワキ少尉を止めて……」

ランドが1号機を見ると、今まさに、コウが発進する直前であつた。

二ナ「ツウ、無茶よつ！」

「地上用で出撃！？無茶苦茶だ！死に行くのか！？」

しかし、無情にも1号機は発進してしまつ。

יְהוָה יְהוָה יְהוָה

二ナは泣き崩れてしまつ。

てしう。

「うわああああああああああ——」

「アーティストの世界」  
——ジマード正也——

ランドは、そういうと、パワードジム改に乗り込み、パワードジム改を動かす。。

しかし、『死』という言葉に反応し、アフリカでの記憶がよみがえ

つてくる。

壊滅した基地で無惨な死を遂げた同僚、ザクが迫る恐怖、暗闇で死を待つだけの時間。そして、3年前の記憶・・・

狂つたように叫び続けるハンド。

ランデは、そのまま戦闘が終わるまで叫び��けていた。

モビルスーシテツキ

大破したガンダムが、ネットに引っ掛けられている。

モーラ「一体、どうなつちまつんだらうね。」

大破したガンダムと、傷一つ無いパワードジム改を見ながら、モーラが亥く。

～ブリッジ～

シナプラス「ガンダムは大破。ランド准尉は出撃出来ないことは……痛すぎるな。」

バーニング「異常な程の怯えよつです……戦線復帰は難しいでしょう。」

バーニングは残念に語る。バーニングの言葉通り、ランドは出撃出来ないのだった。普段は問題ないのだが、出撃しようとするとい、過去の恐怖がフラッシュバックし、狂乱状態になる。パイロットとしては終わりであろう。

シナプラス「ランド准尉は、病院で治療に専念させよつ。丁度、地球からの輸送船が来てこる。一旦艦を下りねばならんなど……」

バーニング「残念です。優秀なパイロットになれる素質があつたんですけど……！」

ドンッ、と壁を叩くバーニング。

しかし、こればかりはどうにもならないのだった。

～「△△の部屋～

キース「ランド、艦を降ろされたらしこせ……」

そう語るキースの口調は、とても重々しい。

「ウ「そうか……」

しかし、「ウは力なく答えるだけだ。

キース「お前つ……そうか……お前も人の事に構つてゐる場合じやないんだな……」

先ほどの戦闘で、ガンダムを大破させてしまい、「ウも落ち込んでいるのだ。

2人は沈黙する。

ア斯顿「あの落ちこぼれ、戦線復帰は無理だつてよ！ハハハハハハハハハ、情けねえなあ！」

2～3人の同僚と、ランドを嘲笑うア斯顿

キース「お、お前なあ……」

ア斯顿「ああつ……」

キース「すいません……」

ア斯顿にらまれ、黙るキース

ア斯顿「ハハハハハハハハハ！ざまあねえなあ！」

ますます調子にのるア斯顿だったが、

モンシア「貴様ああ。何笑つてんだ！！同僚があんなになつて嬉しいのかあつー？」

突然怒号が響き、アストンが振り向く。  
そこには、何時ものような軽薄さを全く感じさせないモンシアがいた。

アストン「ちつ、このロートルが！？偉そうに！」

ベイト「2人とも落ち着きな、なあアーテ」

ベイトが、場をなだめようとし、アデルに呼び掛けようとするべく、

アデル「ふざけるなあ！」

アデルのパンチが、アストンを吹き飛ばす

アストン「ガハッ！」

これには、周囲もざわめく。

一番温厚なアデルが、感情のままに手を出したのだ。

アストン「でめえら・・・・くそがつー！」

周りから向けられた敵意で、アストンは食堂を飛び出した。

キース「モンシア中尉。ランドは・・・」

モンシア「あいつは必ず立ち直る。何せ、俺を倒した男だしな」

そう言つて、モンシアは笑つた。

キース「中尉……そりどすよぬ、かえつてくるに決まつてしまふね。」

この時、キースはモンシアの、本当の素顔を知つたのだつた。

～2日後～

？？？「第307補給小隊所属、アズール大尉。ランド・シュバイツ准尉をお預かりいたします。」

シナプス「よろしくお願ひいたします。」

シナプスは、敬礼で答える。

ランド「…………」

ラングは、無言のまま、サラミス級巡洋艦、アルタイルへと続く通路を歩いた。

クルー全員「…………」

クルー達も、それを無言で見送ることしかできなかつた。

やがて通路は離され、アルタイルは遠ざかつて行った。

## 戦線離脱（後書き）

ヒーッと、じんかいは、な、何とラングドが離脱！？

次回からはオリジナルエピソードに入りますよ

—ブーン

まあ、口だけですがね？

すいません^\_^(ーー;)^\_

頭痛いんで、この辺で失礼をせいでください。

意見、批判、中傷等あつまいたら、お願ひします^\_^(ーー;)^\_

最後に、皆さん、風になお氣をつけください。・・・(ー、ー、ノ)

バタツ

## 復活（前書き）

遅れてすいません？

正月なんで、サボつてました^\_^(ーー・^\_^)

はい・・・今日はランドが復活なんですが・・・眠いです。かなり  
いそいで書いたんで、間違いなどあれば指摘お願いします？

・・・はあ、まだ後書きが(ー、ー、(ノ)

「ラングー・・・」

目を覚ましたラングーは、自分がいつもと違う場所にいることに気が付いた。

「？」「Jは第307補給小隊アルタイルの医務室よ」

「ラングー！」

ラングーは突如として掛かる声に驚き振り向く

「？？？」「あつーーー！」めんなさい。驚かせつけられたわね。私はルイン・パーラー。Jの船のオペレーターをやっているの」

優しそうな、黒髪ストレートの女性だった。

「ラングー、あ、俺はラングー・シユバイツっていいます・・・何で俺は医務室に？確かにアルタイルに乗った所までは覚えてるんですけど・・・」

「

ルイン「あなた、艦に乗った途端倒れたのよ・・・無理が祟ったのね・・・」

度重なる出撃、狂乱するほど今まで追い詰められた精神。

当然と言えば当然だわつ

「ラングー、やつ・・・ですか」

「うむ、ルイン。

ルイン「『めんなさい』。『リカシーがないかもしけないけど、何があつたの?』

ランド「う・・・モ、モビルスーシに・・・乗れなくなつたんです!…乗ると・・・あの時の隊長が、ドムが、ザクがあ!…」

途端に震え叫び出すランド

ルイン「だ、大丈夫!・・・『めんなさい』・・・」

分が悪そうに謝るルイン

ランド「・・・別にいいですよ。自業自得ですから・・・」

ランドも落ち着いたのか  
普段の態度を取り戻す。

ルイン「部屋は203を使って。何もないけれど」

そう、言って、ルインは鍵を渡してくれる。

ランド「ルインさん。ありがとうございます。」

ルイン「ルインでいいです。普段のしゃべり方で構いませんよ

ルインの心底丁寧な受け答えに、ランドも氣を許してきた。

「ラングド」「えっと……ルイン。ありがとうございます？」

ルイン「ふふふ、それでいいですよ。」

「ラングド」「俺と対して変わらないと黙つたばど……ルインは凄いな。」

女性は男性より大人だとよく言われるが。あれは本当なのだと確信するラングドだった。

「ラングド」「ルイン。ありがとうございます？」

「ルイン」「いえいえ、構いませんよ。」

部屋の前まで送つてもらったラングドは、情けないな、と思しながら部屋へと入るのだった。

「ラングド」「特に何も無いな……別に良いけど……」

「どうせテンションが上がらないラングドは、そのままベッドに寝転ぶ。

当然だらう、パイロットとして終わつただけではなく、今も仲間達は戦い続けてゐるかもしれない。

「ラングド」「いや……俺が居たつて変わらない。所詮俺は臆病な落ちこぼれなんだよ……」

子供のようにふてくされながら、ラングドは眠りについたのだった。

久しぶりに夢を見た。3年前の「父」の夢を……

「アルタイルブリッジ」

艦長「アズール大尉、ランド准尉は大丈夫かね？」

艦長と思われる男性が、壁にもたれ掛かつたアズールに声を掛けている。

アズール「今のところは落ち着いていますね。普段は特に問題はないようです。」

艦長「全く、あんなに若い兵士を使い潰すとは・・・連邦も腐敗したな・・・」

艦長は、ため息をつきながら、心底残念そうに語った。

アズール「そのとおりですね。連邦は・・・今こそジャミト」

ルイン「機影確認、距離2000!・・・ゲルググタイプ3!?!?これは・・・海兵隊仕様のMです!!」

アズールが話している途中、ルインが敵機接近の警報を告げた。

艦長「2000だと!・・・岩礁に隠れていたか!! 第1戦闘配備!アズール大尉、第1、第2小隊出撃だ!!」

艦長の命を受け、アズールはモビルスーツデッキへと向かった。

ルイン「（ランド・・・大丈夫かしら・・・？）」

ルインの心配事もつきないのであつた。

～？？？～

3年前、ホンコンシティをジオン残党が襲撃した。  
防衛のモビルスーツ隊はほとんど相討ちで撃破され、しないには、  
3機のザクが闊歩していた。

少年「父さん！行っちゃ駄目だ！」

ああ、これは夢だ。

ランドはそう確信した。

自分の目の前には3年前の自分と、燃え盛るホンコンの町がある。  
そして、3年前のランドの前には、父の姿が見える。  
軍のモビルスーツパイロットでめつたに家にかえつてこなかつた父。  
ランドははつきり行つて父が嫌いだつた。

・・・この時迄は

ランド父「・・・・・・・・・・・・」

この時は無言だったな

ランド「モビルスーツ隊は全滅したんだ！今さら1機で行つたって  
無駄だよ！」

はは、確かに無謀だな。

いくら嫌いでも、実の父に死んでほしくはない。

「ランダ、父」「ランダ、父」

「ランダ」「父やん・・・」

このあとの事は覚えてないんだ。

泣きじゃくつて父を見送った。父が何かを話していたが、それどころではなかつた。・・・これが父を見た最後だつた。

3機のザクと刺し違えて、父が乗つたジムは爆発した。

空っぽの棺、何も思えなかつた。父が死んだ実感が沸かなかつた。その後、なんとなく過ごし士官学校を卒業、軍隊へ入つた。

今思えば、父をおつっていた。父はいつも泣かず、冷静で・・・そして強かつた。

俺はそんな父に憧れていたのかもしれない。

俺はなんて情けないんだ！覚悟もなく一逃げでばかりの臆病者だ！――

「ランダ、父」「ランダ、父・・・私は強いか？」

ああ、むちゅくちゅ強いや。俺とは比べ物にならなこぐらこな。俺は泣きじゃくつて・・・まで――こんな話を聞いたことが・・・

ランダ、父「私はな、すじく弱い。はつきり行つて逃げ出したい。だがな・・・」

俺はこひんなの知らないぞ――？

記憶の中の父は震えながら語る。

ランド父「今さら・・・言い訳をしようと囁つ訳じゃない。私は怖いんだ。死ぬ事よりも、お前を守れないことのほうが・・・」

あ、あ、あ

始めて聞く、父の最後の言葉

ランド父「大事な人を守れない・・・それだけは絶対に後悔したくないんだ。ランド、守りたい者ができると、人は強くなれる・・・お前もそういう人を見つける・・・ああ、それと臆病なのは、全く恥じる事じゃない。気にするな・・・」

父はこちらを振り向き・・・笑った。

・・・そして離れていく

俺は・・・俺は・・・俺は！！

ランド「父さん！！」

ガバッ！と音が響くほどに勢いよく飛び起る。

艦内には、警報が鳴り響いていた。

ランド「後悔だけはしたくない・・・だから、俺に出来る事をするんだ！！」

父の背中を追うのはもうやめだ、これから先は自分で決める！

ランドは勢いよく走りだし、モビルスーツデッキへと向かうのだった。

連邦兵士「ぐるなぐるなぐるな・・・ぐるなあああああ・・・」

連邦兵士2「嫌だ！死にたくない！助けつ」

連邦兵士「うわ、うわ、うわああああああああああ」

3機のジム改が、爆炎と共に消える。

アズールーロン！ キブリー！ ジャン！ くそつ！」

アズールも善戦しているが、こちらはジム改1機。  
敵はゲルググM

アズール「がああああああああ」

ジム改のロッケビット付近にマシンガンが命中し、被弾する。

アスリル、くみ、こちら・・・アスリル、帰還する・・・

何とか敵の弾をよけ、アルタイルのテッキへと着艦する。

アズール「うう、くそつ……すまない。」

整備員「大尉のせいじやありません・・・」

整備員がアズールを引き出し、治療しながらフォローするが、辺りには、既に死のムードが漂っていた。

整備員「死にたくねえ・・・死にたくねえつーー！」

対空砲火が破られた時が、自らの死につながるのだ。

ルイン「私が出ます。予備のジムがありますよね？」

ルインが、整備員に声を掛けた。

整備員「ルイン中尉！？無茶です。死に行くんですか！？」

ルイン「大丈夫です。士官学校で訓練はしていますから。」

アズール「止める・・・んだ、やつらはプロだ、無駄死にする必要  
は・・・」

たしかに無茶だ。

敵は1年戦争を生き抜いたベテラン、操縦を知っているだけでは叶  
うわけがない。

ルイン「しかしつーー！」

ランド「俺が行くーー！」

突如、デッキに違う声が響いた。

ルイン「ランドーー！しかし貴方はーー！」

ランド「もう大丈夫だ。」

ランドは、ルインの制止を振り切り、ジム改へと向かう。

アズール「ランド・・・やれるのか？」

ランド「アズール大尉・・・やれま・・・いえ、やりますーー！」

ランドを知っている人なら、目を疑うだらう。

今のランドには、以前のような迷いがなかつたからだ。

整備員「バイロットスーツをどうぞ」

ランド「ああ、助かる。」

□調まで変わつたランドは、そのままバイロットスーツに袖を通す。

そのままジム改に乗り込み、起動させる。

ランド「ルイン！！」

ルイン「はいっ！？」

突然の呼び掛けに、驚きながら対応するルイン。

ランド「俺、気付いたんだ。大事な人を守れなくて、後悔はしたくない。俺に出来る事があるんなら、全力でそれをしようつて」

ルイン「だ、大事な！？」

突然の告白にテンパるルイン・・・ランドにその気はないから質が悪い。

ジム改をカタパルトにたたせる。

ランド「父さん・・・やつとわかった。おれも父さんと同じだ・・・守れなくて後悔だけはしたくない！！ランド・シュバイツ、行きます！！」

ジム改は、カタパルトから射出されると、勢い良く宇宙へと飛び出した・・・

## 復活（後書き）

「ランド復活早っ！」

いろいろ省いてすいません、（――・）  
キャラクターの細かい設定などは、区切りよくなつたりのせます  
で。

オリジナルルートと、アルビオンルート。ランドはどういう進ませ  
たいか、良ければ意見お願ひします。（――・）

あと、終わったあの 編についてなんですが、

?、特徴無しのコウト  
?、ヘタレのランド  
?、思いきって新キャラ！  
主人公どれがいいでしょ？

意見等ありましたら、気にせずにお願いします。（――・）

## 「ハンド、サムく（前書き）

えーっと・・・既にいんでちょっと省かせて下せこへ（――・）く  
細かい設定は、アルビオンへ戻る頃に書きます。

今回は学校が始まるとなかなかかけなくなるので、早めに書きました。  
相変わらずの駄文ですが、よろしくお願ひしますへ（――・）く

## ランド、宇宙へ

勢い良く飛び出したジム改。

そこまでは良かったのだが、敵に見つかり、集中砲火を浴びてしまう。

慣れない宇宙戦、思うように動く事ができず、あつと/or間に防戦一方になってしまふ。

何とか、周りを飛びながらマシンガンを撃つてくる、ゲルググMの動きについて行く。

ジム改のスラスターを吹かせ、上手くゲルググMの後ろに着く。

サイトを会わせようとすると、敵も捕らわれまいと必死に動き回るが、

ランド「よおし・・・頂つ」

トリガーを引く直前だった。田の前にもう1機のゲルググMが現れる。

ランド「なつ！？」

ランドは、田の前の敵に集中するあまり、1対3だという事を忘れていた。

とつさに緊急回避するも、先程までいた場所には、既にマシンガンの弾が到達していた。

ランド「長引けばアルタイルが狙われる・・・どうすれば・・・」

そつ思いつつも、ゲルググMからよけるだけで精一杯だ。

3機は、鮮やかな連携プレーでランドを確実に追い詰める。

「ランド」「こいつら、なんて連携・・・待てよ？」

「このまま消耗戦になれば、確実にこちらがやられる。  
そんな時、ランドはある事に気が付いた。

「ランド」「俺の読みが正しければ・・・」

「ランドはあることか、ジム改を動かし、あえて敵の連携プレーに  
嵌まりに行くのだった。

→アルタイルブリッジ→

何人かのクルーが、ランドの戦いぶりを固唾を飲んで見守っている  
なか、ランドは突如無謀とも言える行動をとった。

「アズール」「馬鹿な！わざわざ敵の策に嵌まるなど…やられていない  
だけでも奇跡な物を…！」

傷をおったアズールもそのよつすを見ていた。

「艦長」「くそっ。やはり彼は狂乱しているのか…？だからあえて死に  
に行きに・・・」

艦長もランドのあまりにも無謀過ぎる行動に苛立つている。

連邦士官1 「くそつー！ こんななら奴を出すんじゃ無かつたんだ！」

連邦士官2 「何であんな奴を・・・誰が出したんだ！」

ブリッジは、混乱に包まれ、あたりではランドの批判が飛び交う。

ルイン「違うっ！」

そんな中、ルインがあたりに響く大声で叫んだ！

ルイン「ランドはそんな気持ちで行つたんじゃない！！私たちを守るために行つたんです！」

連邦士官1 「し、しかしあの戦い方は無謀過ぎるのでは・・・？」  
いつも大人しさを全く感じさせないルインに士官は驚き、自信無さげに反論する。

ルイン「なら、貴方は出れますか？」この絶望的な状況の中で「

連邦士官「うつー？ そ、それは・・・」

見も蓋もない言葉をいわれ、連邦士官は黙る。

ルイン「ランドは、臆病・・・いや、優しすぎるとです。けれど、私たちを守るために戦つてるとですよー！ 私たちが信じてあげなくて、一体どうするんですかっ！」

とても澄みとおり、そして決意を込めた言葉がブリッジに響く。

連邦士官2 「そうだ……俺たちが信じてやらなくて、誰があいつ信じるんだ！」

ルインの言葉に反応して、ブリッジは沸き立つ。  
来て間もないのに、「信頼」という大きな物を得たラング。これは何かの才能なのかも知れない。

沸き立つブリッジで、ルインは一言小さく呟いた。

ルイン「ラング……生きてかえって来てください……」

その声は、とても震えていた。

ジム改が、飛び込んで来たのをいいことに、3機のゲルググMは、ジム改に連携攻撃をしけ、四方からマシンガンを浴びせかける。

ラング「I-Iで当たつたら……」

ジム改を必死に動かし、マシンガンに当たるまいと避け続ける。

しかし、完全には避けきれず、機体のいくつかの部位が悲鳴をあげる。

ラング「へやつ…やるしかないか……今だあ……」

攻撃に当たるのを覚悟で、ランドはジム改を、避けさせるのではなく、後ろへ「向かせた」

「ランド」・・・・・頂き」

そう呴いたランドは特に狙うこともなく、ありつたけマシンガンをぶっぱなした。

その射線上には・・・いままさにマシンガンを撃とうとしているゲルググM。

マシンガンはそのゲルググMを貫いた。

2機のゲルググMは驚いたのか、動きを止める。

ランド「見事な連携だ。けど、必ず1機が後ろ「死角」に来る。それが・・・弱点だ！」

マシンガンを捨て、ジム改はビーム・サーベルを構え、ゲルググMへと肉薄する。

咄嗟にビーム・サーベルを抜こうとしたゲルググMだったが、一歩及ばずビーム・サーベルの餌食になる。

残ったゲルググMは、必死にマシンガンを撃ち、抵抗していく。おそらく僚機が撃破されたことに動搖しているのだろう。

「ランド」・・・・・・・・

ランドは無言でそれを避けながら、ジム改を接近させる。

逃げようと背を向けたゲルググMを、ビーム・サーベルが容赦なく切り裂いた。

「ランド」・・・父さん。俺、父さんを越えたかな・・・

「ランドはふと十<sup>ト</sup>き父に向かつて問い合わせたのだった。

ガショーン！

と、言つ顔を立て、ジム改がアルタイルの『テッキ』へと降りる。

ジム改を固定せらるると、『ツクピットからランドが降りてくれる。あたりにはクルーが集結しており、ランドに向かつて歓声が送られている。

ランド「な、何かむず痒いな」

ランドが頬を搔きながら、照れ臭そうに笑つてゐる。

ルイン「ランドッ！」

ルインが、『抱きついてきた』

ランド「うわあっ！…・・・ル、ルイン！？」

未だに女性と手を繋いだこともないランドは、突然の出来事にテンパる。

ルイン「良かつた・・・無事で、本当に良かつた」

ルインは泣きながらランドの胸にヘルメットを押し付ける。

ランド「あ、あ、あ、あ、あ」

しかしランドはそれどころかでは無かつた。突然の出来事、それとノーマルスース越しでも、女性の『ソレ』は感じられる。

10人に聞けば、10人が「デカイツー！」と答えるほどの『ソレ』を押し付けられ、ランドは気が氣では無かつたのだ。

クルー一同『死ねええー』

クルーの嫉妬は爆発した。

ランドは生還したばかりなのに、再び死にかけるのだった。

→アルタイルブリッジ→

艦長「うむ、なら君は戦線に復帰できるのだね。」

ランド「はい。自分はモビルスーツに再び乗れるようになりました。」

ランドは艦長の問いかけに、そう答える。

艦長「そうか、良かつたな。良ければ、アルビオンへ戻る前に、1つ作戦に参加してもらえないだろうか。」

ランド「作戦……ですか？」

艦長「そつだ。この近くで略奪行為を続いている、ジオン海兵隊が居てな。本艦はその作戦に補給艦として参加することになったのだ」要するに、先程戦闘した奴らがこの近辺で問題を起こしているので、殲滅しき、といつ、基本的な残党狩りだ。

「ラング」・・・・・・・・

「ラングは少し迷って、

「ラング」・・・・・・・・

「ラングは少し迷って、

「ラングは少し迷って、

「ラングは少し迷って、

「ラングの部屋へ

飾り気のない部屋でベッドに寝転び、ラングは今日の事を振り返っていた。

「ラング」「参加するって言つちやつたけど・・・良かつたのかなあ

突然弱氣になる。ラングは基本『ヘタレ』なのだ。

「ラング」「けど、何かあつたとき、俺が戦えば誰かが助かる。そうだ

よな。」

基本的に補給艦は戦闘をしないからだ。

ランドはそう自分に言い聞かせると、眠りに付くのだった・・・

その日、ランドは再び父の夢を見た。それは、幼い頃の父と遊んだ、父の数少ない記憶の夢だった・・・

ランド、宇宙へ（後書き）

はい。次回もオリジナルエピソードです  
——（・・）——  
ブーン

いろんな方から、ソロモンまではオリジナルで行けば？  
といつ意見を頂きましたので>（――・）<

まあ、全くおもしろくもなく、浅い話になると思いますが・・・？  
ランドも復活（早すぎましたね？）、次の戦闘では活躍します！

ランゲのステータス（ジエネワールド等から参照）

# 初期 現在（ソロモン戦以前）

覺醒	守備	反應	格闘	射擊
:	:	:	:	:
?	1 2	5	1 3	1 4
?	1 7	2 2	1 8	2 0

スキル

?

後ほど調べてのせます？

- ・・・あれ？軽くキース越えましたね？  
このペースで行くと ではどうなるのやら・・・

まあ、ソノダはかなり負けじで成長をさせたので、『お心へトセ  
い。

意見などあつたら、作者の心は『お心へ』、お心へお願  
いつかへ（――・）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4459y/>

機動戦士ガンダム0083 もう一つの星の屑

2012年1月8日02時46分発行